

P 10 アトピー性皮膚炎モデルマウスにおける 補中益気湯の皮膚炎抑制作用：形態学的 観察と cytokine の動向について

○上奥敏司、小林裕美、寺前浩之、水野信之、忽那晴央、山中一星、石名航、平田央、斧山淳子、本村綾、藤田直子、石井正光（大阪市立大学大学院皮膚病態学）平井和子（同生活科学研究科 健康栄養学）

[目的]我々は、1980年代よりアトピー性皮膚炎（以下 AD）患者の難治例の治療に漢方方剤を併用し、良い治療成績をあげてきた。今回は、補中益気湯の AD における皮膚炎抑制機序を明らかにする目的で、AD のモデルマウスを用いて真皮の浸潤細胞の動態と肥満細胞の形態学的変化を観察し、さらに脾臓リンパ球のサイトカイン産生の動向を評価した。

[方法]動物は雄性 NC/Nga マウス（以下 NC マウス、日本 SLC）を用いた。これらのマウスは conventional の環境下で、control 群（C 群）は通常の飼料で、補中益気湯群（H 群）には 2%補中益気湯エキス（カネボウ）含有飼料にて飼育した。肉眼的に AD 様皮膚症状が十分完成されたと考えられた時点で背部皮膚を採取し、免疫組織染色法を用いて真皮の CD4, CD8, IL-4, INF- γ 陽性細胞の浸潤の程度を、また光顕、電顕レベルで真皮のマスト細胞を観察した。さらに脾臓リンパ球におけるサイトカイン産生の差異をみるために、INF- γ , IL-4, IL-13 の mRNA 産生量を定量 RT-PCR 法を用いて測定した。

[成績] 免疫染色法では、両群とも IL-4 陽性細胞は少なく、INF- γ 陽性細胞が優位であった。また INF- γ 陽性細胞数は H 群において有意に低値であった。肥満細胞の観察結果では、光顕レベルで C 群において肥満細胞数が多く、また真皮の浅い部分において脱顆粒している肥満細胞が目立ったが、H 群では肥満細胞数が少なく、脱顆粒像も少ない傾向にあった。電顕レベルでも H 群では肥満細胞の形状が比較的一定しており、脱顆粒像も少なかった。脾臓リンパ球における IL-4 mRNA 産生量も、H 群において低い傾向にあった。

[結論]以上の結果は、補中益気湯の INF- γ 陽性細胞、肥満細胞に対する抑制作用、および脾臓リンパ球に対する何らかの作用を示唆するものと考えられる。